



はじめに

今回は、座間丘陵の美林50選地「県立座間谷戸山公園」の森を訪ねる。そのあと、丘陵を南下して古墳群や国分寺跡などを見ながら海老名駅まで歩く。

コースは、小田急線「相武台前駅」～かきが沢公園～座間市役所展望回廊～県立座間谷戸山公園～星谷寺～（鈴鹿・長宿地区）～座間駅～秋葉山古墳群～国分寺跡～「海老名駅」。距離は、全部巡ると約9 km。鈴鹿・長宿地区をカットすると約7.5 km。鈴鹿・長宿地区をみて座間駅までとすると約5 kmとなる。

伊参（いさま）郷と古代の道

930年頃編まれた古代の百科事典「和名類聚抄」に高座（たかくら）郡「伊参（いさま）郷」の名がある。この「いさま」の「い」が取れて座間となった。

奈良時代末の東海道は、諸説あるが足柄峠を超え、坂本（南足柄市関本）から小総（おぶさ）、箕輪を経て、海老名に至り、そこから夷参（いさま）駅馬（うまや）を継いで、店屋（まちや）、小高を経て下総に向かっていたといわれている。

今回は森だけでなく、このルート上に残る古代の遺跡をあわせて訪ねてみようと考えた。

かきが沢公園

相武台前駅からほど近い所に、

目久尻川支流の沢地形を生かした「かきが沢公園」がある。

かつてはその名のとおり、沢蟹も息できる湧水を集めた清流があったのだろう。

カニさんにはきのどくだがカニの楽園が今は桜の大木や花のある緑地として整備され、地域住民の楽園になった。

座間市役所展望回廊

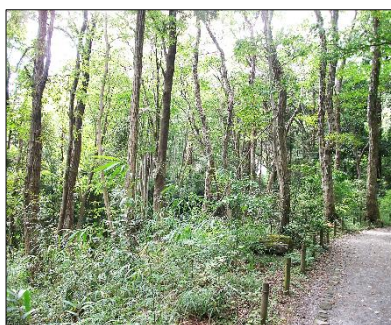
市役所の7階は展望回廊となっている。丹沢の山並み、そして大地を埋め尽くすかのような住宅やビルの群れが遠くまで一望できる。

県立座間谷戸山公園

市役所のすぐ前が約30haの「県立座間谷戸山公園」。

公園の売りは「心温まるなつかしい風景と出会う」とある。

昔を知る人には懐かしさと心の安らぎをあたえ、昔を知らない人には昔の原風景を体感し、里山体験館で自然と共生した人々の生活を実感させる。ということか。



森は、湧水を集めた水鳥の池を中心にコナラやクヌギの林、スギ、

ヒノキ林、シラカシ林などがある。

森をぬう散策路のほか、所々に野鳥観察小屋が造られている。

スギとヒノキのある森を歩く。木は太くはないが高さがある。

今から60年ほど前の座間町の植林面積は6.5ha。植栽樹種は松が3万7千本、スギが4千本、クヌギが14百本とある。松が飛び抜けて多いが理由は不明。

この山にもこの割合くらいで植えられたとすると、一番多い松は見あたらない。

利用しつくしたか、長い年月のうちに遷移にのみこまれたのか、それとも松くい虫にやられたのかもしれない。スギは大きさからして、その当時に植えられたものもあるようだ。ヒノキの類いはサワラの方が多いとのこと。

森は針・広入りまじり高木・中木・低木そして下草と、長い年月をかけてできる自然林の様相を呈し、奥深さがあり、森に包まれるなんともいえない心地よさがある。

星谷寺

公園西入口の長屋門を出て線路沿いに進み、坂東三十三観音霊場第八番目の札所「星谷寺」に向かう。寺は奈良時代に創建された古刹で市指定重文の宝篋印塔や国指定重文の梵鐘がある。

ちなみに坂東三十三観音のうち、県内には九観音あり、観音めぐりの道が巡礼街道とよばれて今でも所々に残っている。

ここで「森を訪ねて」は一区切りとし、各人の都合に合わせて次の行程を考えよう。

今日はこれ以上歩くのはちょっとという人は、星谷寺の前の通りを下った所に地域と市が歴史的景観保存の協定を結んでいる鈴鹿・長宿地区があるので、森とは違った里の生活のたたずまいを味わって帰るのがよい。

鈴鹿・長宿地区、座間の湧水

かつての藤沢街道沿いのゆったりとした家並に湧水公園や佐渡に流される途中で日蓮が休んだという寺や総鎮守の神社などもある。



座間市内の湧水は、開発などにより個所も量も減少しているとはいえ、湧水箇所が15カ所あり、水道の85%は地下水で賄われている。おいしい水にちがいない。

座間丘陵を南下する

まだ体力と時間のある人は、座間丘陵を海老名の国分寺跡を目指して古代ロマンを追っていこう。

この道は古代の幹線道路。西国の防衛に駆り出された防人なども

歩いたに違いないと一人合点して、万葉集の東歌でしられる「相模嶺(さがむね)の小峰みそぐし 忘れくる 妹(いも)が名呼びて 吾をねし泣くな」の雰囲気を丘陵上から大山の嶺を歩き眺めてあじわおう、というのも趣向の一つ。

座間駅の少し先から尾根に向かう細い道を上る。丘陵の斜面は尾根筋まで住宅がせまる。住宅地の間の道路の先や住宅の切れた所で相模川と丹沢の山並みを見る。

歩いた日は、ぬけるような青い秋空に大山が浮かび上がるという思い描く構図とはならなかった。

そのためか、防人の気分にはなきれなかったが、三角形の神奈備型の山容が美しく神々しい。

しばらく歩くと国指定史跡「秋葉山古墳群」。



秋葉山古墳群

この古墳群については、私が下手な説明をするよりも説明版があるので、それをそのまま記す。「秋葉山古墳群は、座間丘陵の頂部に立地し、海老名市内で最も高い場所(標高75~80m)にあります。北から第4号墳、第5号墳、第3号墳、第2号墳、第1号墳と5基の墳墓が地形に沿って連なっています。古墳群から西を望むと、現在「海老名耕地」と呼ばれる水田と南北に流れる相模川が一望に見渡せます。また相模川の向こうには、丹沢山塊や大山を望むことができます。このような景勝地であり、交通の要衝であったことか

ら、この辺りを治めていた首長は、この地に歴代の墳墓を築いたと考えられます。・・・」

調査によると3世紀後半から4世紀のもので、方形から前法後円形まであり古墳の変遷がわかる。

3世紀は卑弥呼の時代。

急な坂道を下り、上星小学校の脇を通り国分寺遺跡を目指す。

相鉄線を越え、相模の国で最古の運河といわれる逆川の遺構？をちょっと見ながら行くと相模国分寺跡の緑の広場がみえてくる。

相模国分寺跡

天平13年(741)国分寺建立の詔が発せられ、全国に国分寺、国分尼寺がつくられた。相模の国では、この地につくられた、

7重の塔の基壇、金堂、僧坊そして門と回廊などの礎石が残る。

高さが約65mあったという塔の1/3スケールの観光モニュメントが中央公園にある。



遺跡隣の「温故館」で詳しく学び古代の情景に思いを馳せる。遺跡から500mほどで海老名駅。

海老名耕地と呼ばれ、班田収授における条里制の遺構ではないかといわれた水田はビルの谷間に隠れるようになった。一昔前の駅周辺の田園風景が大型商業施設などの出現で一変した。

秋葉山から見おろしている古墳の主も、さぞかしビックリして戸惑っているにちがいない。

(2016、9 瀧澤)